

# 県立大生・姫路の社会人交流

## 「中小企業で働く利点は」▶「責任重く成長」



県立大(神戸市)は今秋から、県内11市町や地元産業界などと連携し、新しい地域ブランドの開発(姫路市)や淡路島の景観保全活動といった地域活性化事業をスタートさせた。文部科学省が活性化の拠点となる大学、短大などの活動を支援する「地(知)の拠点整備事業」に県立大の事業が選ばれた。県立大は現在、各市町や団体と詳細な計画を作成中で、来年から活動を本格化させる。

(大館司)

同事業は、文科省が大学や短大などを拠点にした地域社会への貢献などを目的に、今年度から公募。全国52件を選んだ。最長5年間、事業費を補助する。

県立大の「ひょうご・地(知)の五国豊穰イニシアティブ」事業は今年度、文科省から5549万円の

▲意見交換会「学生とコラぼる会」のメンバーら  
 (19日、姫路市の県立大姫路環境人間キャンパスで)

## 地域振興事業スタート

来年から本格化

補助を受ける。播磨、但馬、丹波など県内に七つのキャンパスを持つ利点を活用。地域ブランド開発や淡路島の景観保全に加え、コウノトリの野生復帰(豊岡市、篠山市、丹波市)▽限界集落の再生(養父市、佐用町)▽住民、企業、NPO、自治体による協働の仕組み作り(尼崎市)▽南海トラフ地震や大規模災害への備え(神戸市と淡路島)の六つの活動に取り組み。

その手始めとして、19日には、姫路市の姫路環境人間キャンパスで、同市の職種異なる若手経営者や会社員による異業種交流組織「コラぼる会」と、学生が研修会を開催。コラぼる会のメンバーと学生が7、8人のグループに分かれ、中小企業への就職について意見交換した。

学生たちは「中小企業で働く利点は」「なぜ現在の職場を選んだのか」などと質問。コラぼる会メンバーの経営者や会社員らが「自分のアイデアが経営トップに届きやすい」「一人あたりの責任が大きい分、自身の成長を実感出来る」などと経験談を交えて説明した。

県立大環境人間学部2年、延原翔さん(20)は「中小企業の最前線にいる人たちと向き合ってるの討論は講義と違った面白さがあった」と満足そう。同事業を担当する地域創造機構支部長・熊谷哲教授(63)は「学生が地域に入ることで活性化させ、新しい人とのつながりをつくっていききたい。活発な地域連携を考えていく」と話した。